

文庫6  
1881:  
2

地  
6  
2

美豆

淀の大橋の南の里より則京街道の順路ありて一里美豆の印故とて既の  
ありしむと小金川より此西より水と凡廿六丁云入江野

五月雨とらつての五段の橋もまたわづらひたも  
あり

木津川

水源は伊賀より出山城和東より出る水と合流す末  
良川といふ又泉川の和東よりの流をとりて西義決せ

淀大橋

右木津川より出る大橋の北より大橋と小橋の間に有る  
百三十六間

間小橋

大橋の北より大橋と小橋の間に有る  
小橋と名づくるあり

淀大渡

木津川印牧の西より北に流れる淀川と合せ大渡とこれと  
舟より大渡向小橋小橋おと架させり

淀

毎日長谷寺より淀の川とて舟ありとて有  
大堰より津路行程九里あり

大堰より津路行程九里あり  
大堰より津路行程九里あり  
大堰より津路行程九里あり



船  
 声の  
 稀  
 める  
 川  
 数城



淀大橋

五月雨

舟の  
 心

淀の人

鞭石

東京  
 大久保  
 地蔵



つづも桂川鴨川宇治川木津川木のちち合くううれがよきとわうくまうく

淀城 其初岩城主頼助がきづく前より其後豊公の清康中其地を領するに

より淀殿と号し常陸川の流れありて其地は美事なり城下の大橋

淀河 城廓の五畿内第一の大河として六國の水を以て歸會江

河内伊賀 河水の常々溶々と流るる流れ難波津を往く舟の

昼夜も小間断り城郭の汀より水車ありて波は随ひ翻々と

やがる領主の茶亭橋上の往來の美景遠々として足びといふ夏

まゝ又此所の鯉の名産として殊に美味なり高貴の献上する

城辺の魚と用の 俗にこれと見え 故に常の遊獵と禁あり

於邊 づつとよきつづつとよきつづつとよきつづつとよきつづつとよき 忠見

淀小橋 城廓の上より長七十六間橋下の大間鐵燈籠と釣夜灯と燈

伊勢向宮 小橋の東より天照太神とまつ此は浮城より洪水の時とよ

巨椋大池 伏見の大池より長二十九町幅十五町とよ 船中より見ればわづの入口も

伏見 此地より花洛より約二里日本紀より俯見と書り和歌山より

徳川のゆきとつづつとよきつづつとよきつづつとよきつづつとよき

文禄三年秀吉を所在より町に該建後として西國より東國北國へともく喉口

の港とよき町敷二百六十余町舎屋六千二百余軒とよき見より京原より

東側とよき本より西の道と竹田側とよきつづつとよきつづつとよき

白雲の  
あけあけ  
淡の水  
言水



淀城  
御茶屋

鯉のうきや  
わらき

梅室



其二

漢河東望  
帝王州二  
月春風上  
瀨舟却訝  
蓬窓猶有  
月夜來白  
雪滿汀洲

釋元皓



川風の菖蒲  
ふさふさ  
溪の町  
曲水

との橋  
涼らふそ  
溪の舟  
柳室



二  
リ  
フ  
五

上  
三  
四

其三

子月梅も

及らぬされど

新あまきまうらや

下江渡の

あつこ

冬降



西山雨晴  
曉落花漲  
漢津城頭  
水車子酌  
取萬斛春  
巖垣彦明



其四

水車

流のつちの

修程あり

つちのつち

きん

つちのつち

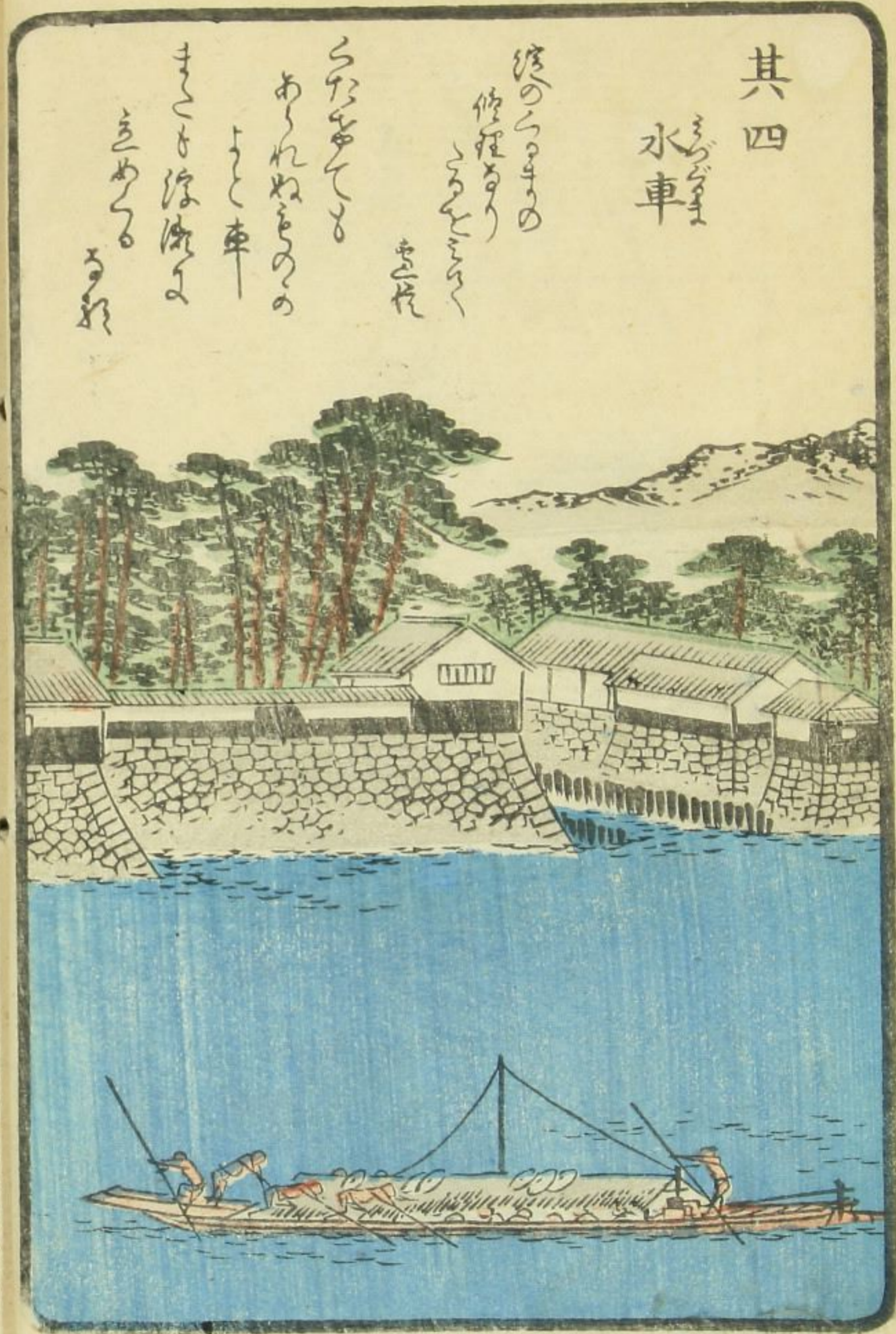
あつねのつち

つちのつち

つちのつち

つちのつち

つちのつち



子奴まつり

流のつち

つちのつち

宗因

名もや

流のつち

つちのつち

水車

言水





其五

あゝぎげ

二ツの橋と

渡の糸

惟然



鏡

灯さや

渡のこゝ

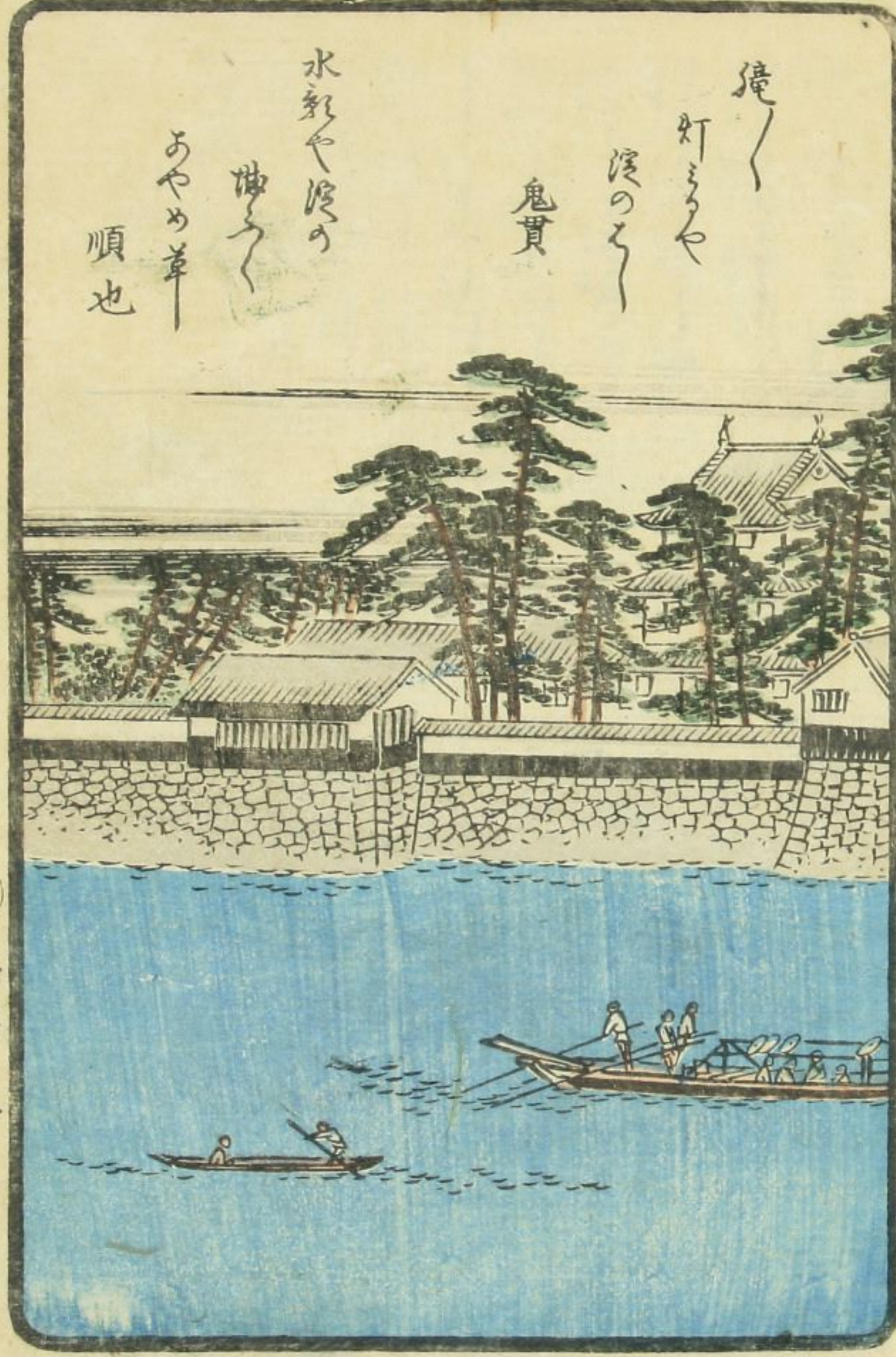
鬼貫

水鏡や渡の

御さ

あやめ草

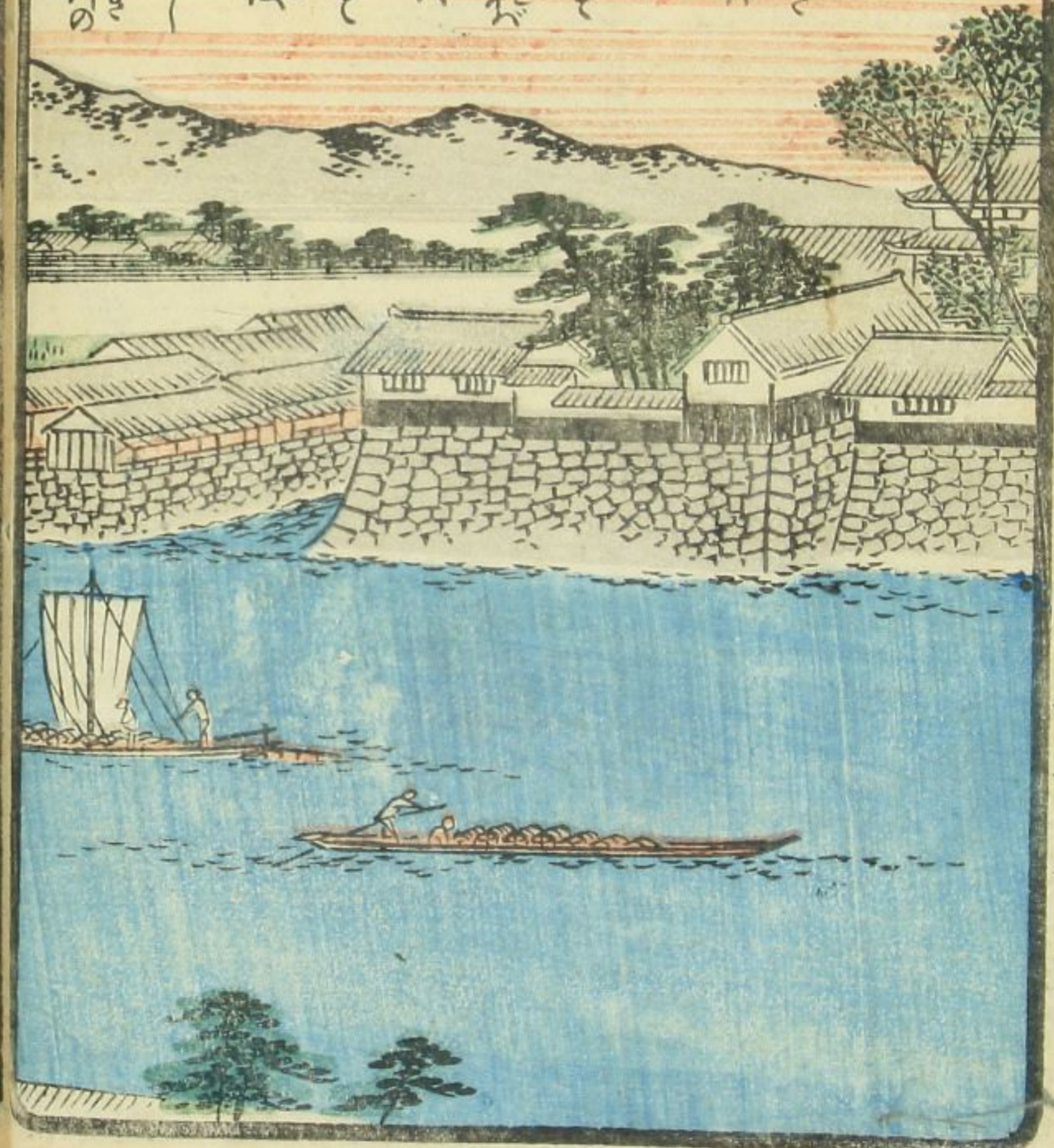
順也



其六

小橋

橋の山は三つ並に  
 貨食店は後方の人の  
 かひて高き物に  
 足すは流川の流るる  
 橋のくまに如く  
 伏見の川も  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち



舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち  
 舟のすなはち

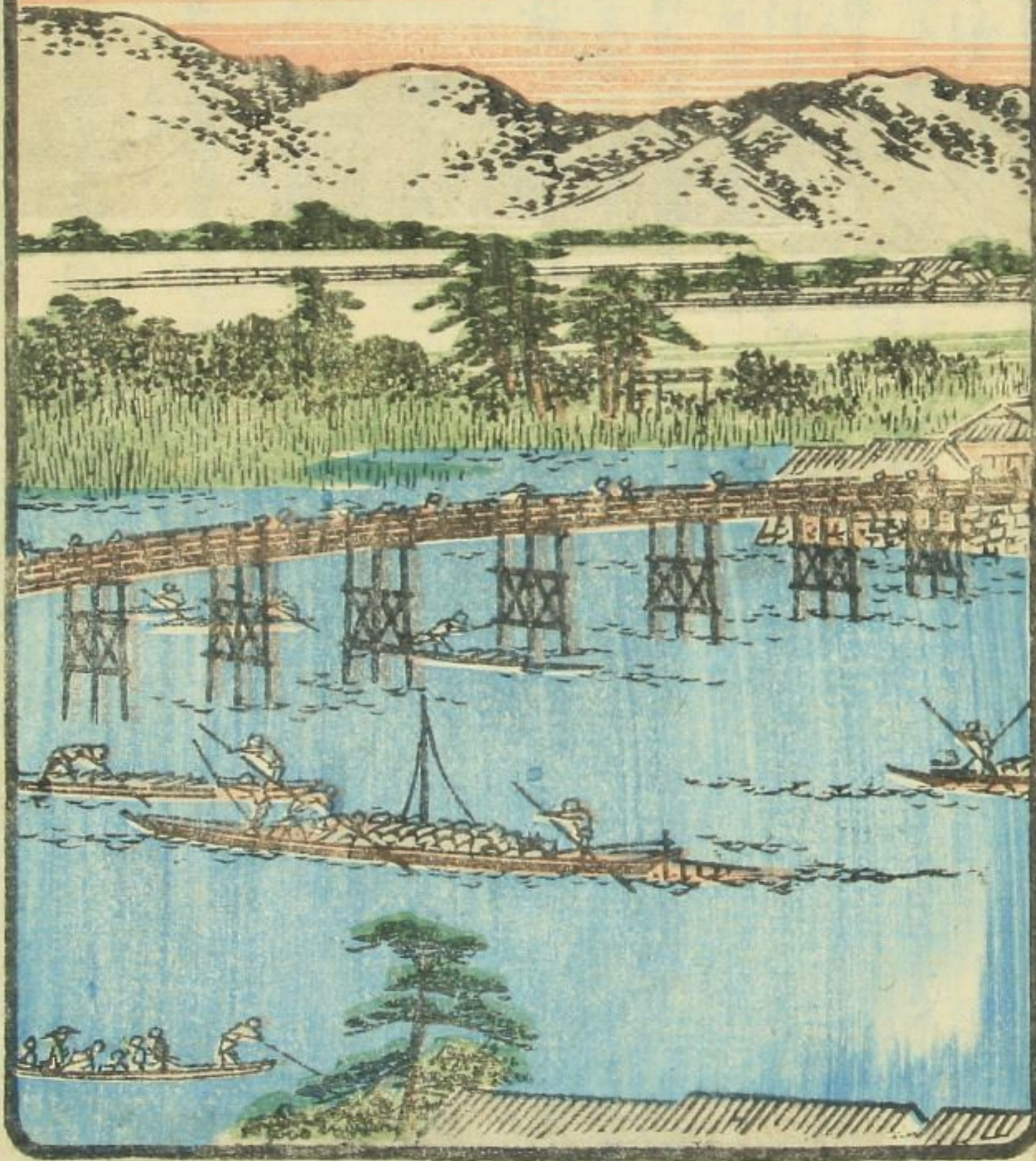
橋の町も

あがらう

あがらう

あがらう

千山



八  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十

新吉 夏かへ通る絶ぬ暑休の都の里の雪の下好 有家

朝戸明く伏見の里とらむむれは兼よむせぶ宇治の河波 俊成

此余野山沢田あぐ人の和歌多し高名所旧蹟をり有とらふも夏にげれがこれと畧一は御所のかこもりもあつてかつても一二とらふもの

肥後橋 伏見の入口下三抽より西渡町より長サ十五間半京橋より着岸の登舟は此川より入るこも第一番見ゆれん

三栖社御旅所 肥後橋の東詰より例祭九月十六日生土の神輿 此所は渡御あり

住吉神社 肥後橋の東船大工町より宝藏院これと守護は東濱より着岸の登り舟は此川より入る

今富橋 東濱より中書島より長サ十八間幅一間六尺一寸 此橋は船着きくろくは

中書島 今富の東詰より一説は文禄年中向島に墨と禁くとりつらば中書島の地より慶長のころは伏見の城と共滅亡せりそれより年々

荒廢の地とらりて後世は女町とらりての江口神湊は準へ旅客の船と

辯財天社 中書島より本宮は辨財天女の像は弘法大師の作とす例年六月廿五日祭れり

京橋 今富橋西詰の北の方の濱より北へは北詰と京橋町とらる橋の長サ二十二間此詰は御高札場より渡小橋より是まで水上凡五十町

當橋の辺より浪華より京師より上下の通船州石今井或は傳道の荷

船ホの船岸として夜とらりて昼とらりて出入の船と間断なく且都に通る

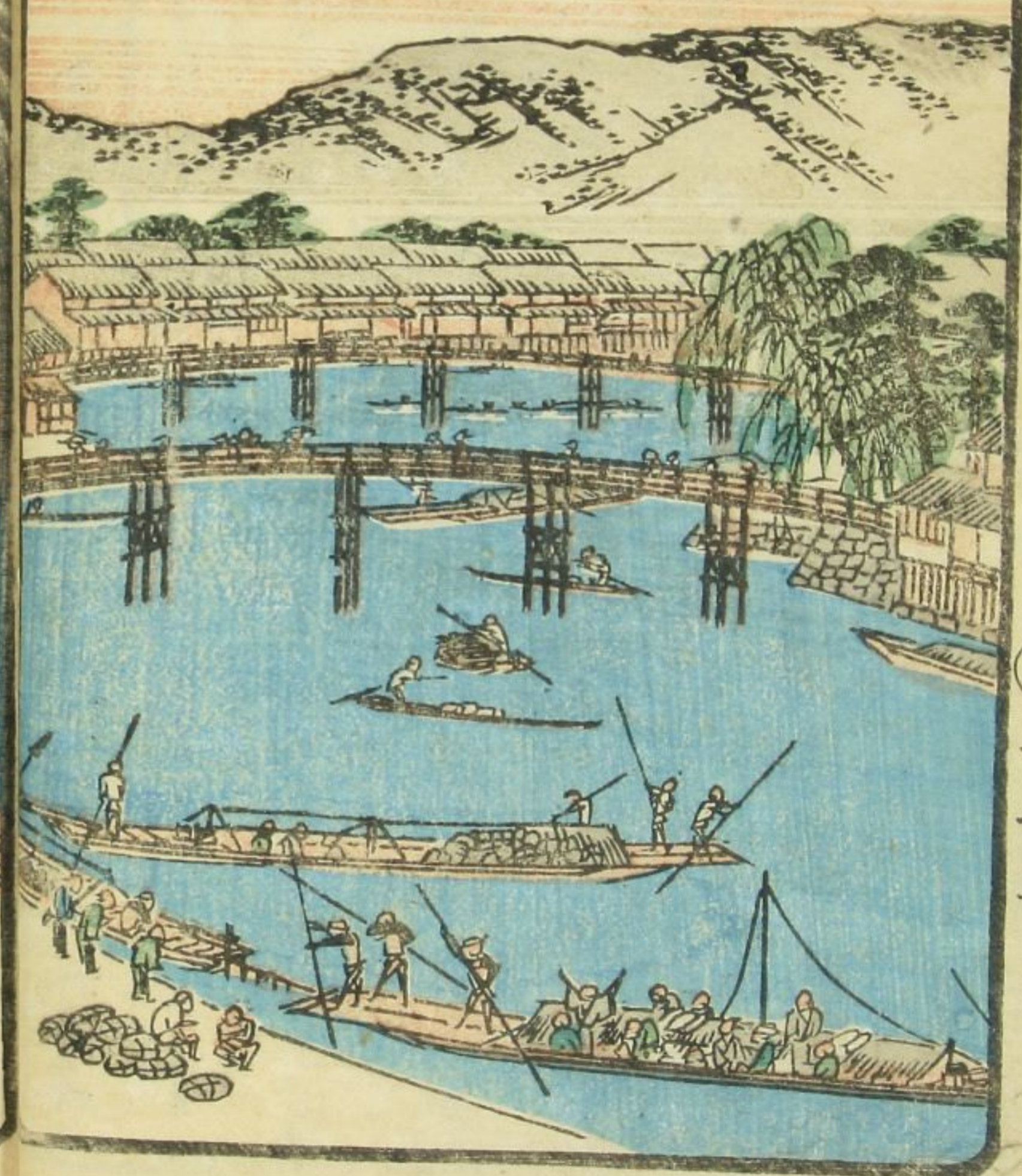
高瀬船宇治河下は紫船かどく喧々京振の往返関東

上下の旅客群集の地とらるが故に旅舎貨食家の多し俗に言も更

なり土産物の商家旅行用具の正店脚店軒とつらぬとあられと

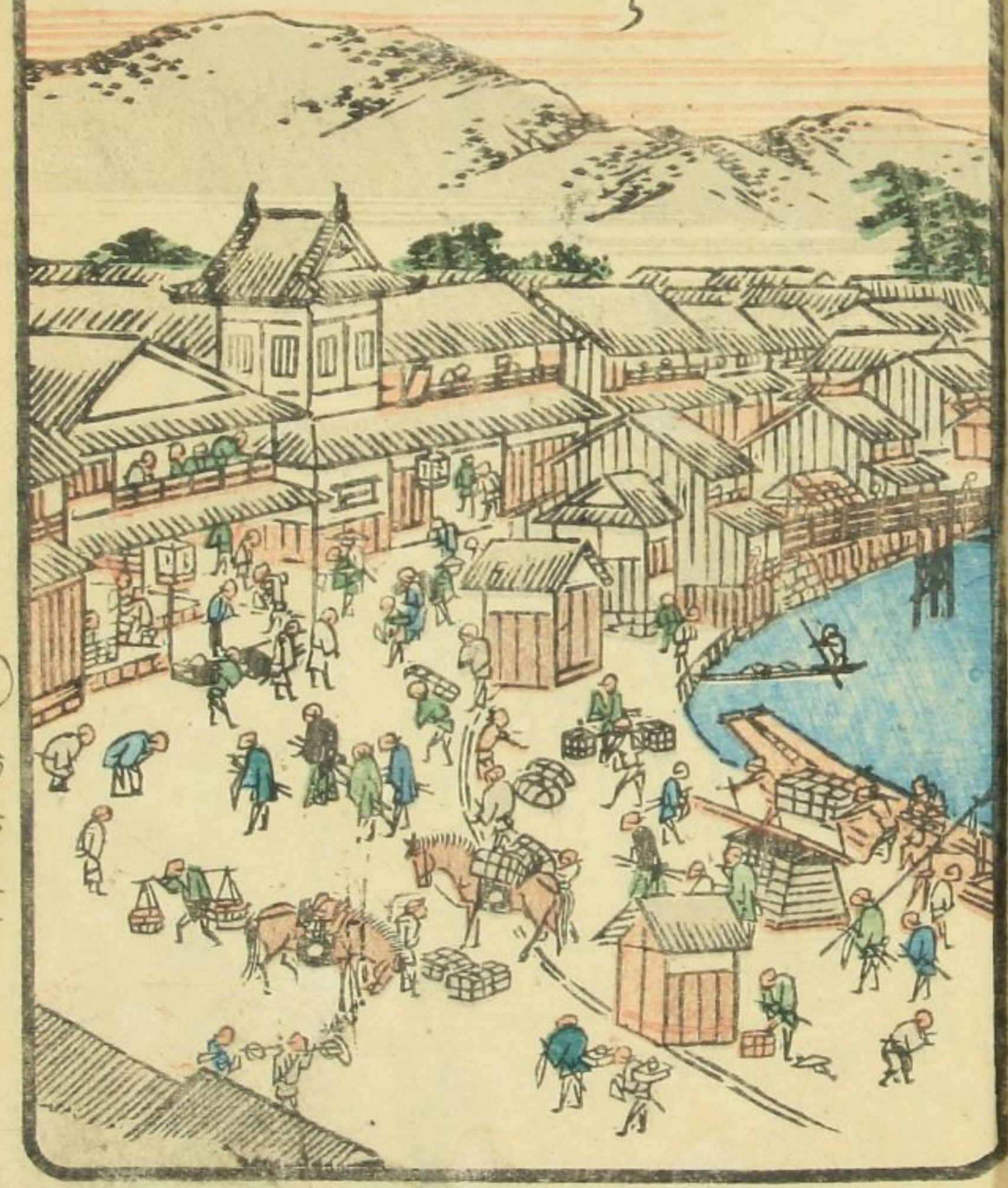
伏見  
京橋

伏見の城の遺風  
 角は城聖のてら  
 埃樓のつら  
 うるべ一奇観  
 うり



十  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十

寺合の歌  
 山崎の  
 大寺の  
 油



敗ぐされば船上での老若下での男女づれも船宿よ入るべきを  
調ふ故に烟草揚枝紙より煙菓子煙頭とあり童子銭の両替青物  
賣按摩按摩の療治人本堂修震の勸進係立かたり入かたり此  
来り敷くむ飲食とんぐ度星の上客られ下客迎ひよ来る  
船頭りりも暫しも静らざるに皆此の賤ひなり

阿波橋

肥後橋の川より上番渡とあり舟宿のまき方最まきり  
橋の上南法町より中書島は紫の橋の長三十二間幅二間此橋より

蓬萊橋

京橋の上南法町より中書島は紫の橋の長三十二間幅二間此橋より  
京街道の往還より上り下りの舟人よりありてありてあり

船上での旅客京師より到る各其勝手は任せて同じくびとよ凡

此橋條と北へ下板橋通に至り  
右へつて墨深

深草とつて末入と本街道といふ  
或は伏見の  
又たへつて下板橋と渡り

車道より北へ上り  
是東洞院通より竹田村より西六条より趣く六好斎屋の南の方  
より西へつて竹田村より油小路よりつて是と西竹田村より

御香宮

本寺前町の北側より御法度の  
本社の祭神神功皇后  
宿称の女あり

九所堂

拜殿の傍りあり  
伊勢両宮  
本社の後左右の  
末社  
本社の後  
神樂殿  
本社の後

御炊殿繪馬舎本地堂

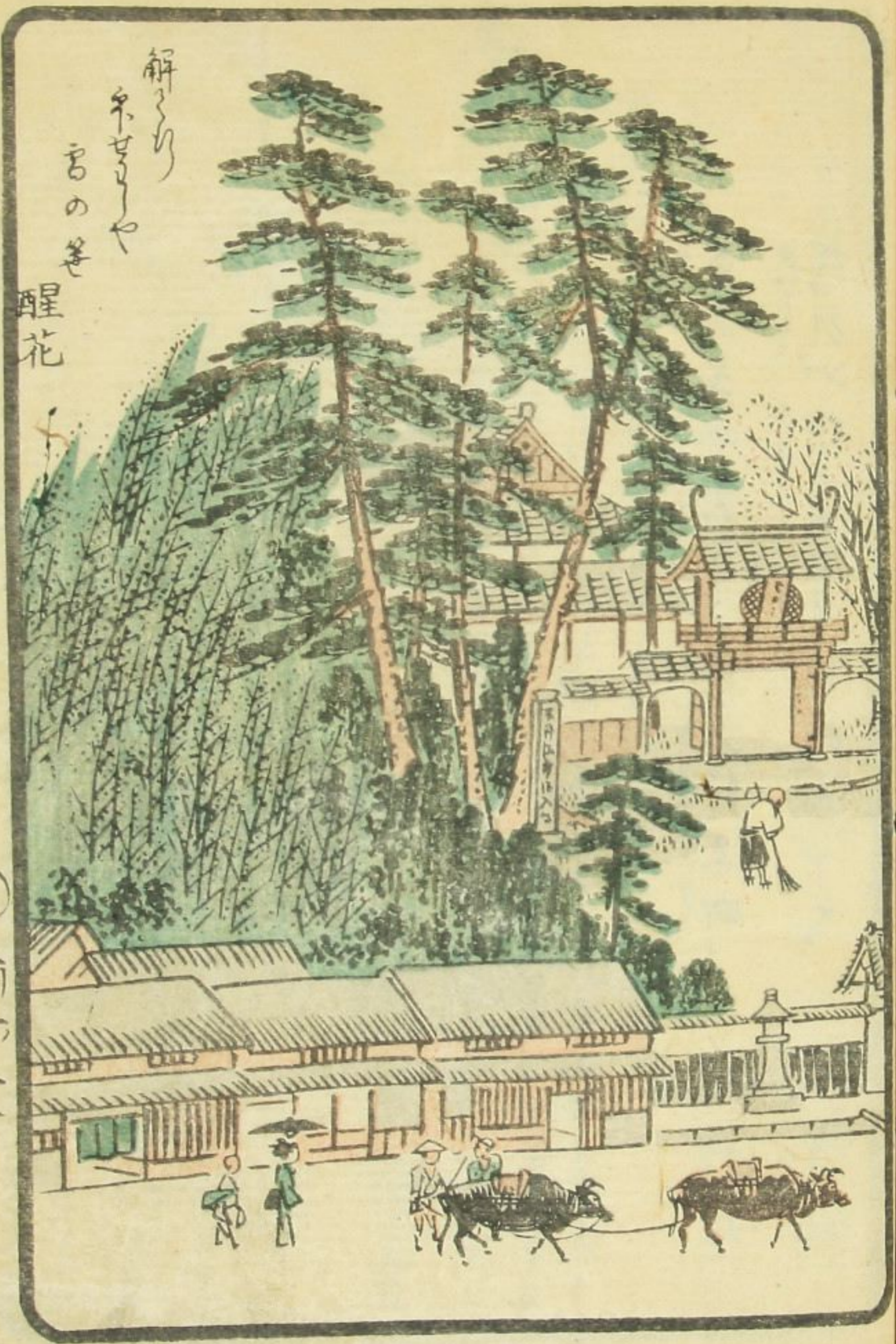
鳥居の内なる間より  
賽石  
あよりつてあり

御香水

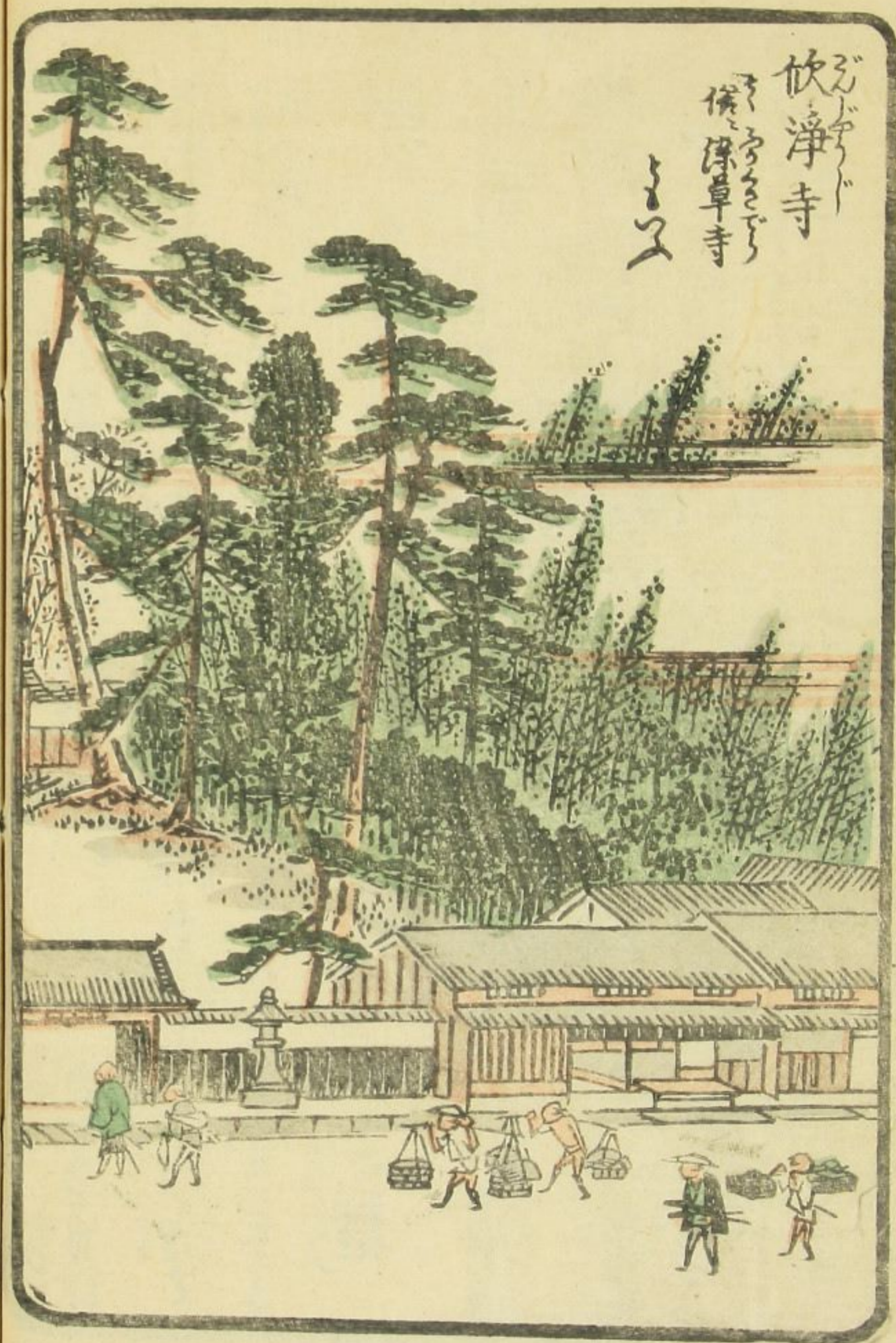
まの所の傍りありは水  
拜殿南門  
伏見の橋中よりつてつてつて後

欣浄寺

樹々の東側あり  
本寺の阿弥陀佛  
太子十六子の序次  
深草少将塚小野



解  
糸  
言の巻  
醒花



飲  
淨寺  
侯  
深草寺  
よ

小町塚 この町のつら 少將通道 せうしやうのあひら 道元禪師石像 だうげんぜんし

七瀬川局墳 ななせがわのくまづか 墨染井 すみぞめ

竹の下道 たけのしたみち

深草や竹の下乃分 ふかぐさやたけのしたのわか 前直八 まへなほち

撞木町 つづきまち 本名多比と町秀吉公伏見所在城 ほんなまたひとまちひでよしこうふしみぞこ

慶長九年十二月傾城町と免許ありし けichoくねんじふにがつかぢやうぢやうとめんぎょありし

葉の花や裏 はなはな 這入陣本町 こゝろいれぢんぼん 何狂 なにくる

新丸や垣のあ あらまるやかき 可風 かふう

墨染 すみぞめ 撞木町の西三丁 つづきまちのにしさんぢやう 寛平三年堀川太政大臣昭宣公 けんぺいさんねほりがわたいぢやうだいじんしやうけんこう

薨し給ふ時上野本雄哀傷の和歌と おとせたまはるときかみのほんゆうあひらむのわかと

墨染よ すみぞめ

康頼入道の室物集 かやうりやうだうのむつものあつ

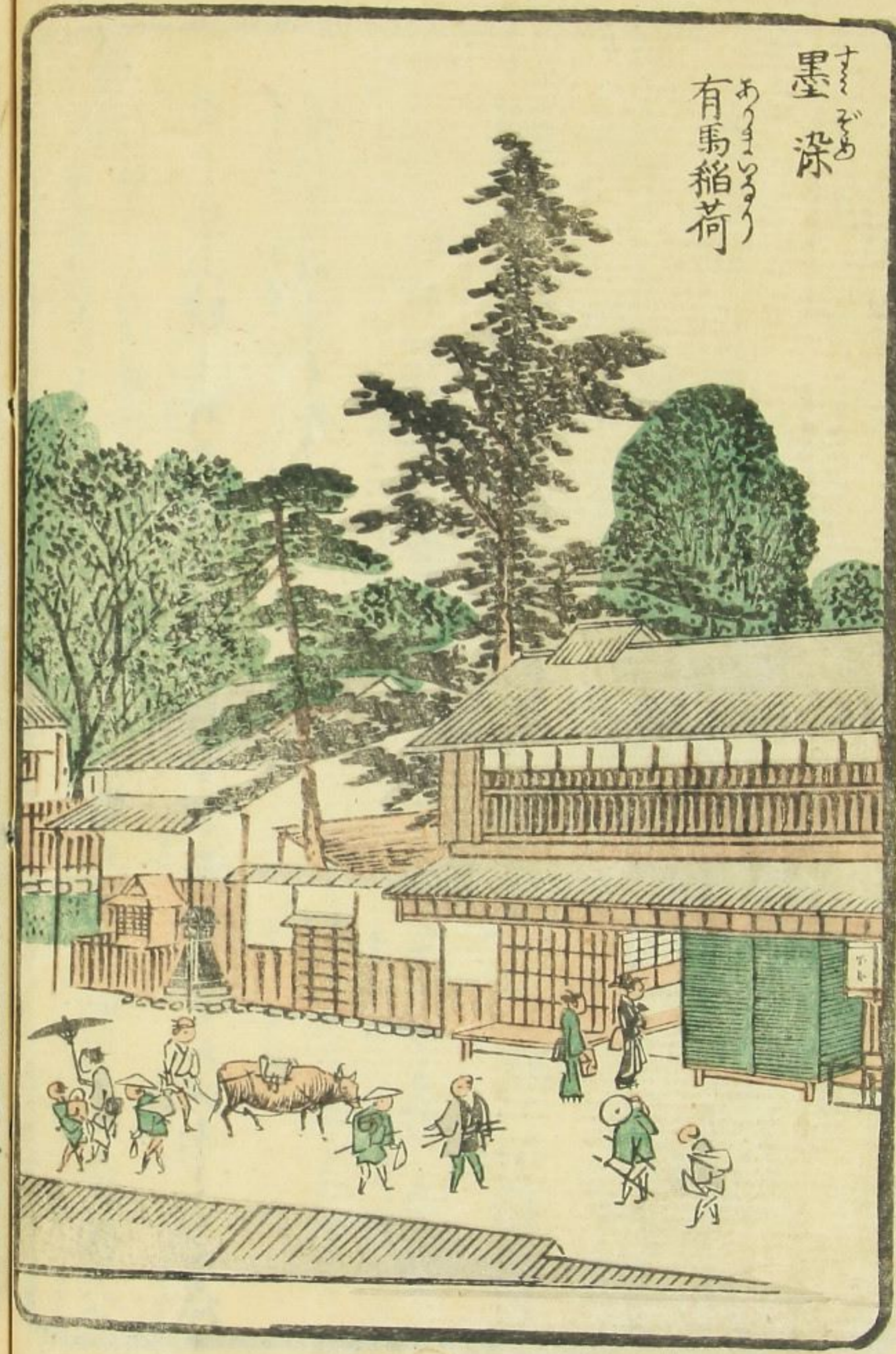
世継物語云 よつぐみものがたり

世継物語云 よつぐみものがたり

世継物語云 よつぐみものがたり

世継物語云 よつぐみものがたり

墨<sup>すみ</sup> 漆<sup>ぞう</sup>  
有馬<sup>あま</sup> 稻荷<sup>いなぎ</sup>



梅<sup>うめ</sup> 木<sup>き</sup>  
お<sup>お</sup> 木<sup>き</sup> 坂<sup>さか</sup>  
う<sup>う</sup> の<sup>の</sup> う<sup>う</sup> の<sup>の</sup>  
咲<sup>さ</sup> 中<sup>ちゆう</sup> の<sup>の</sup> 花<sup>はな</sup>  
香<sup>か</sup> の<sup>の</sup> 木<sup>き</sup>  
結<sup>むす</sup> 成<sup>なり</sup>





墨染の衣うせ世の花籃かりとれてもとりてくるが

墨染寺 同前南例 當寺ハ往昔清和天皇降誕のときり小宮祚

祈のり大相國忠仁公の建るひ 貞觀寺の旧地より慶長の頃ハ方丈

書院巍々として秀吉公ハ所成あり新あり又什室ハ豊太閤の

衣冠の画影あり長谷川等伯の筆ハ新像の上ハ秀吉公自筆の

和歌あり 太閤これとつて新像ハ用ひまひり

ありれとる香とるる様其の花の面新墨染あり

墨染松 堂前より古びよりて居せりゆりて



墨染の衣ハ墨染松ハ徳元

羊ころのや墨染松ハ徳元

墨染の地名せよ名あり今ハ伏見御所として徳舍貸合家建

つとて歌舞の声系竹の音平けり有る最徳元

藤森神社 墨染の 本殿三座中央舎人親王 東ハ早良親王 西ハ伊豫親王と

祭 舎人親王ハ天武天皇の皇弟として天平宝字三年ハ追尊ありて 崇道盡敬皇帝

末社 八幡 大將軍 菅大臣 熊野 嚴島 諏訪 旗境 本社ハ東にあり 神功皇后三韓

神樂殿 御供所 馬場 例祭五月五日 神輿渡御

南谿

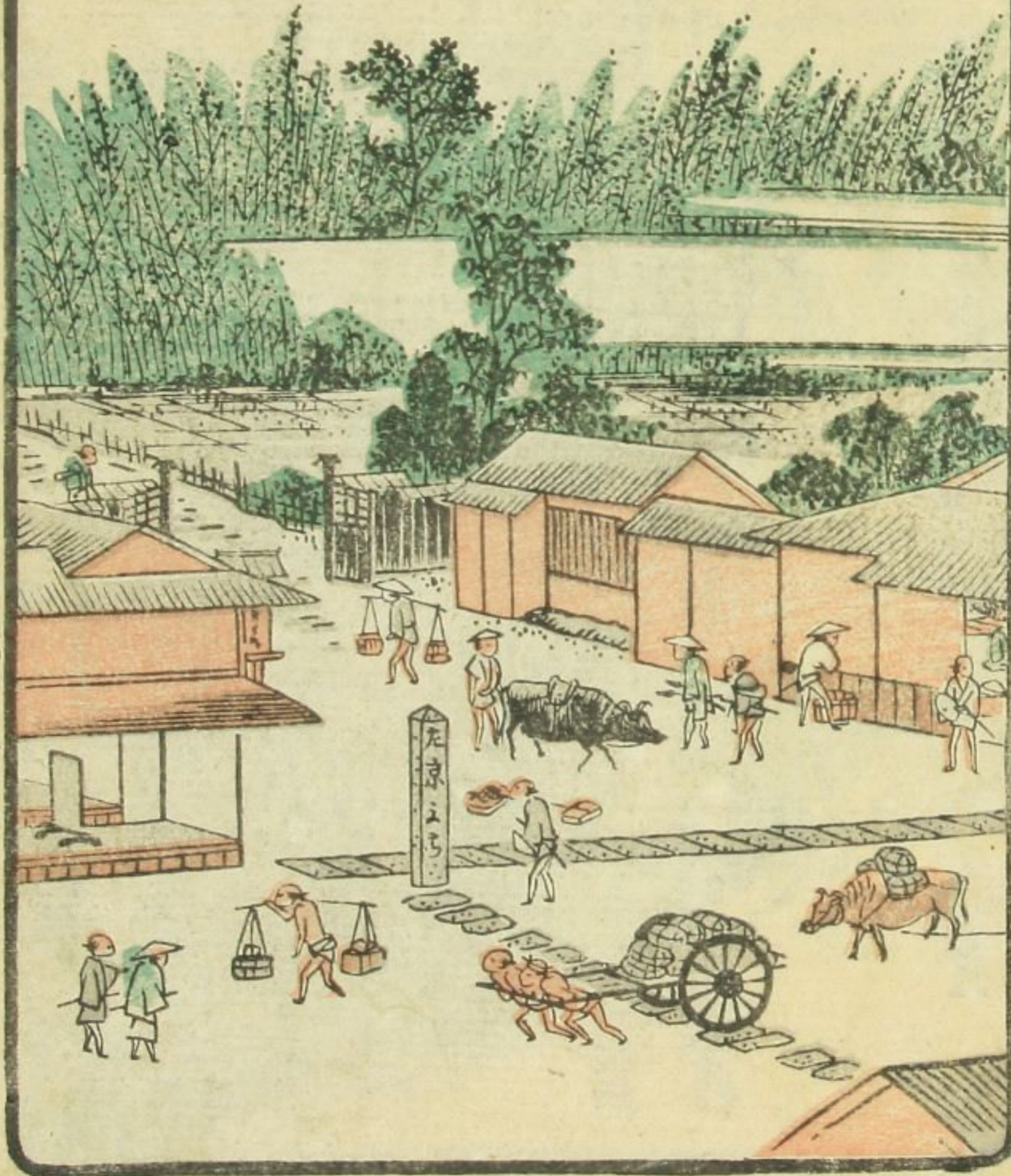
サダ

ひら

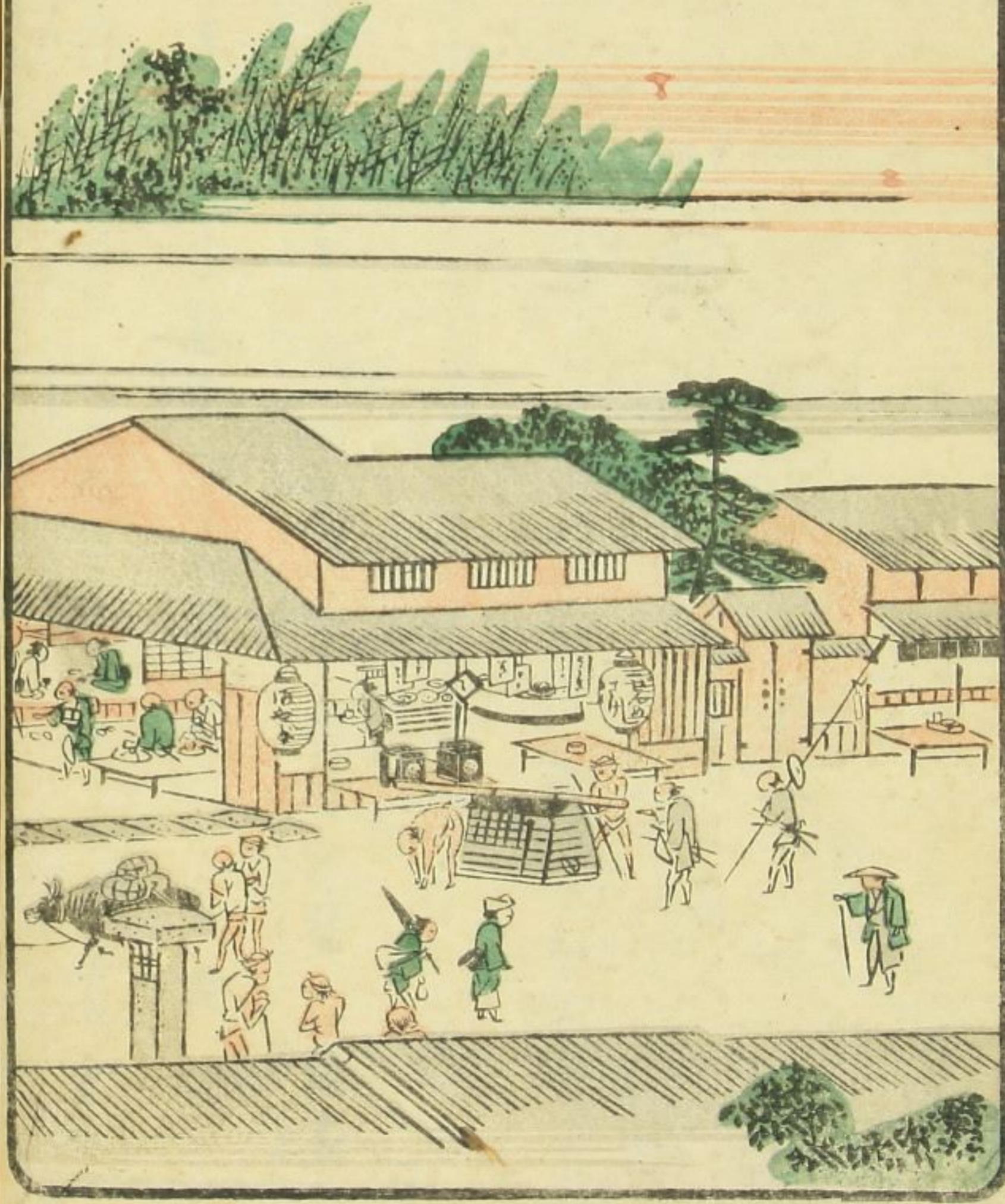
牛の

伏見

あ  
うや



藤杜岐道



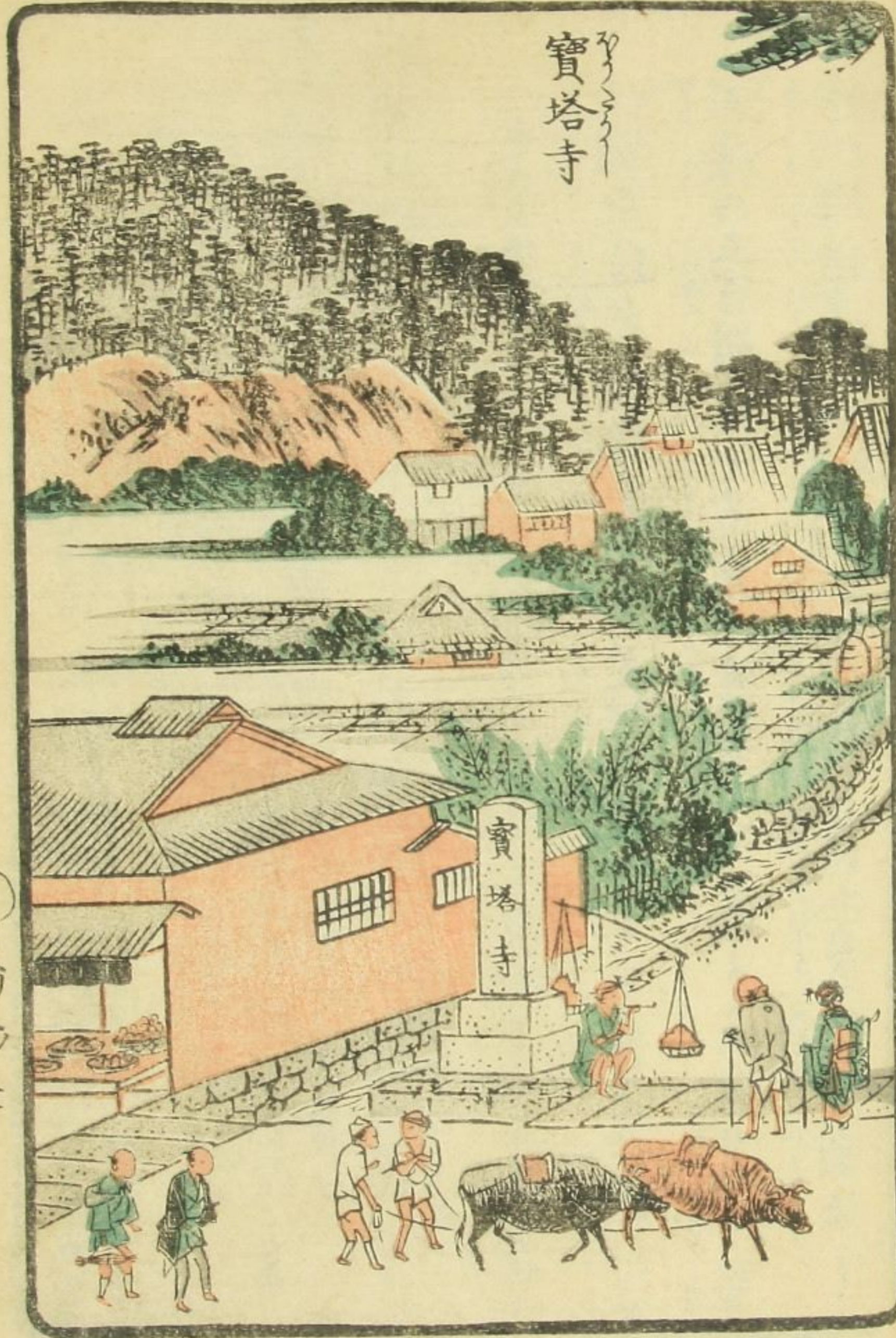
伏見  
藤森社



五  
二  
七



寶塔寺



廟塔 日像上人書と云の石塔婆あり 釋迦千射堂 七面明神社 後のふみあり

七面明神の鳥居の額ハ元政の筆ニ例祭九月十九日 濟世法王の額ハ千景和尚の筆

石峰禪寺 宝塔寺の北ニ隣 本尊釋迦佛 左右ニ聯あり 共ニ同筆あり

藥師堂 本堂の傍ニあり 本尊藥師佛 表門 額ハ即非の筆ニして 高着眼と書ハ

當寺ハ黃檗の六世千景和尚の同基ニして黃檗退院の後此地ニ

住職と近年安永の半より天明の初ニ至つて當寺の後山ニ

石像の五百羅漢と造立一靈鷲山と爰よりつれ其形勢

中央釋迦牟尼佛 長凡六尺許 周ニ十六羅漢五百の大弟子圍繞一

釋尊說法の体相と作る 羅漢の像あり三尺許のれも自然石と耶

尤雨露の覆るくして山中ニ充満一自ら苔むり其雅なりと

言語ニ絶せり 實ニ無双の奇觀と云べし

稻荷神社 伏見御乃つあり此御乃復傍より南ハ 本社第一宇迦御祝神第二

素盞烏尊 宇迦御魂神の 第三大市姫神 已上ニ座往古ハ三峰

小宮田中社 命 四大神 五十猛命大屋姫 此ニ神と加へ併て五座

と稱ハ 弘長三年ニ告らる 樓門朱の玉垣きくびやう小権殿禮殿

舞殿末社神庫繪馬舎鳥居木巍々として 神官館社僧の坊也

伏見

稲荷社いなりのみや

神門臨大道  
元午晨靈辰  
祀典踰羣社  
三燈福萬春  
楓杉青錦地  
更宜吟望人

祇園瑜



美草

奥も

綿糸山

尺草



軒とつねう程と都鄙の諸人間動り就中毎年二月初午の

日と銅年間の例よとく神事とあり其前日より遠近の貴

賤群泰の皇都第一の姫ひるり例多し四月上の卯の日とて

三月二の午の日神輿五基九條の御結所と渡御あり

卯の日まて神輿を置くとれとあり

其間所結中と移して歩くとれ群衆あり

前後に供奉し神具雲のてと列と魏々溜々として壯麗

なる祭式あり

東福寺

伏見街道の東傍にあり恵日山と  
号に禪宗濟家五山の第四あり

本尊釋迦牟尼佛

座像の大佛あり

其結構法入月とありありあり

別と近來神輿ありとありありあり

其結構法入月とありありあり

別と近來神輿ありとありありあり

其結構法入月とありありあり

別と近來神輿ありとありありあり

其結構法入月とありありあり

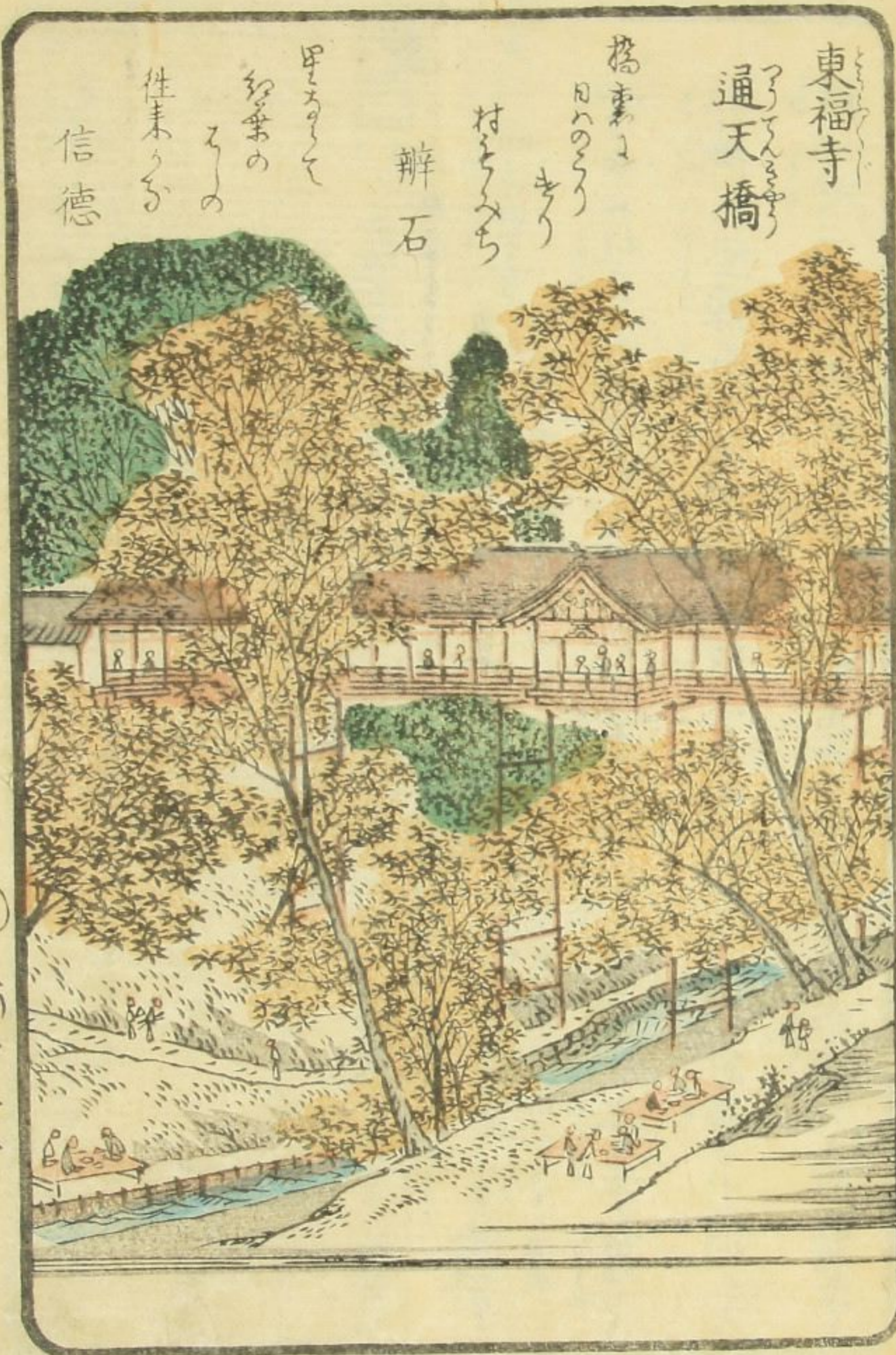
別と近來神輿ありとありありあり

其結構法入月とありありあり



朕士觀音 虛空藏 各座 檀の隅ハ四天王東西の朕檀ハ帝釋天  
 及ハ達磨大師 百丈禪師 臨濟禪師 開山國師 等の像あり 佛殿の  
釈音十八天衆と 法堂 佛殿の 選佛場 佛殿の 方丈 法堂の 傳衣閣  
再ハ北殿司の華し 開山廟 其の餘東司鎮守社十三層の石塔鐘樓庫裏  
 浴室山門 巍々として 伽藍の美觀言語絶せり 通天橋ハ法  
 堂より祖堂へ通路の流溪ニ架せる橋下の溪と洗玉礫と号し  
 左右の崖ハ悉く楓林として 秋の季ニ紅錦と浪と号す  
 如く別謂洛陽觀楓第一の勝地あり 程ニ文人墨客詩と

賦一歌と詠じて 懷と述べて 都下の男女打群 酒宴と催し 紅顔と  
 夕陽ニ争ふ 十月十六日ハ 閑山忌 聖一國師 として 世俗此日と辨當  
 收と稱し 觀楓と号し 遊糸と名けり 又二月十四日  
 十五日ハ 佛殿ニ 涅槃像の大幅 北殿司 と懸し 詣人ハ 縦觀  
 せし 遊客これと 吾々始と号し 群集ハ  
 涅槃會や 東福寺ハ 帆と号して 圓ノ  
 閑山忌と ありハ 留主の 稻荷山 浪化  
 三之橋 東福寺の境外伏見街道ニ有 二之橋 同形及ニ郊外九八町の間に二の橋  
流れハ洗玉礫より出ゆ



東福寺

通天橋

橋東

日ノ

きり

村

辨石

甲

の

の

往

信徳

上  
二  
七  
二



上  
二  
七  
二

一之橋

東福寺小門前伏見街道の北一町余三つり水源ハ新熊野社の良の谷より  
少右三橋より橋の末は是より西の方より加茂川ニ入

ひり時雨一二れり乃牛笠を

荷今

子規一二れり橋の秋あけくも

其角

龍尾社

一の橋の末傍にあり拜殿馬舎末社神樂藏あり近年再営より本社及び  
拜殿あり美観あり境内ニ三乗の楓あり是所謂真の楓樹なり

大佛殿方廣寺

目伏見初名のゆかり寛政十年七月雷火に焼亡し其礎石のみ  
存り百分一のそ像再建より又近年大像の半身成就し假堂ニあり

當寺ハ往昔天正十四年豊臣秀吉公の御建立より本尊ハ廬舎

那佛の座像長九間四尺五寸巾十三間二尺四寸後光の高十八間五尺

座の廻二十五間佛殿ハ西向して東西共七間五尺五寸南北四十五間貳尺五寸

棟高二十五間柱數九十二本許差徑九尺許廻廊南北百廿間 東西百間高三間半

二王門十五間三丈寺 六間七尺高十間二尺金剛力士の長一丈四尺狛犬高七尺南門南門 高七尺

棟高五間撞鐘堂四間四方柱數十二本鐘高一丈四尺指し 九尺三寸有九寸堂前ニ建る

石燈爐ハ列國諸候の名と刻む佛殿の敷石又正面石垣の大石ハ

國々出陣の名或ハ諸候の紋所あり廻廊の外ハ櫓を築き交えて

植たり慶長元年閏七月十二日地震より佛像と崩れ

秀吉公其後信別善光寺の弥陀佛と迎へ安置り同二年八月善光寺

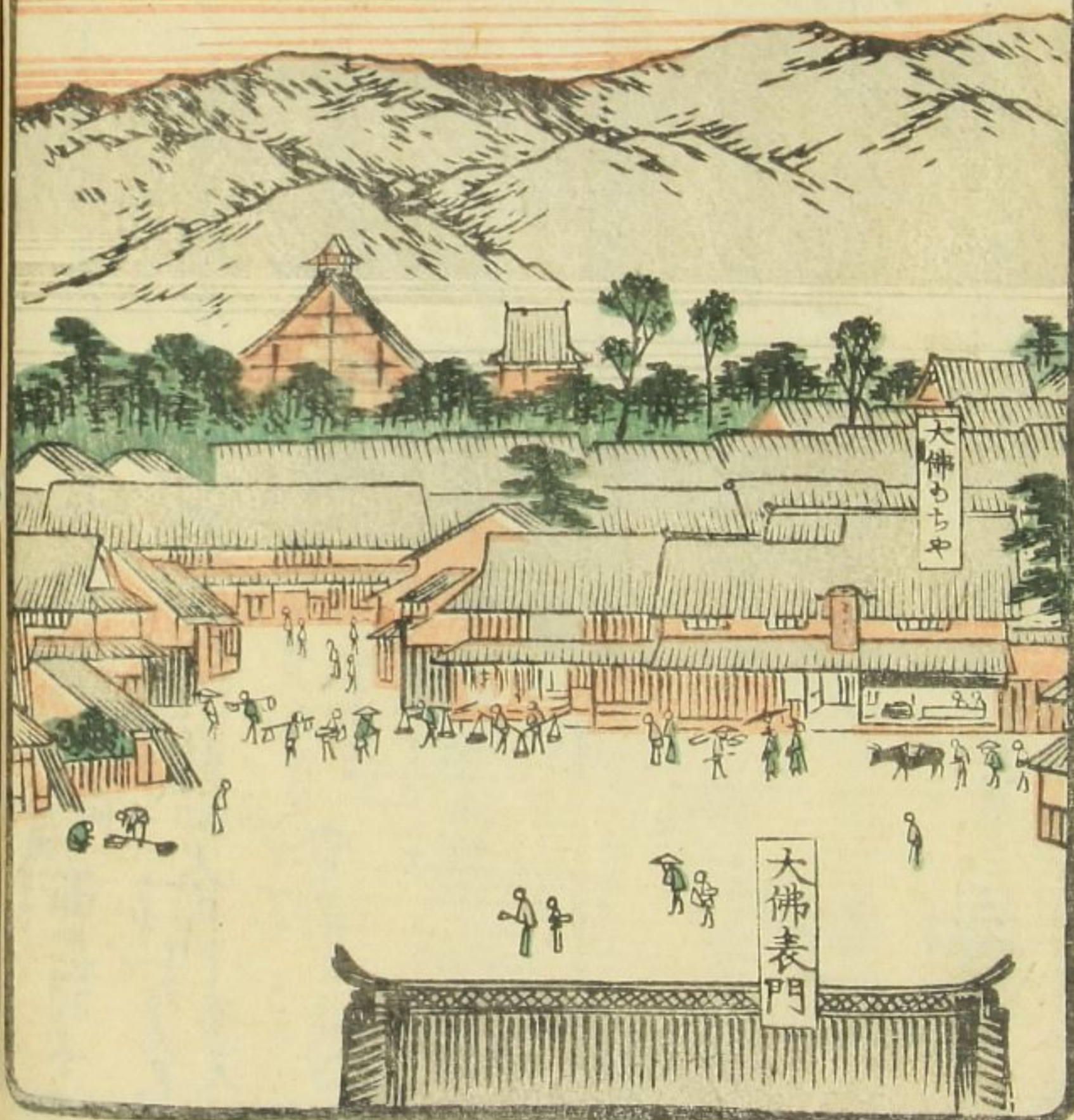
ノ扉座同三年又大像と造同七年號失此及ハ銅像ノ摸ハ然ハ鑄損ト

大佛門前

耳塚

納戩當時築小止  
毘盧殿畔土饅頭  
雲關窅恨雜林月  
濤送凱歌馬鳴舟  
古藓兩穿聲微底  
孤墳草翠色含愁  
偏憐京觀非規宅  
聳絕鄉音不可求

餘易



耳塚

蚊のうぐ

声もあらうり

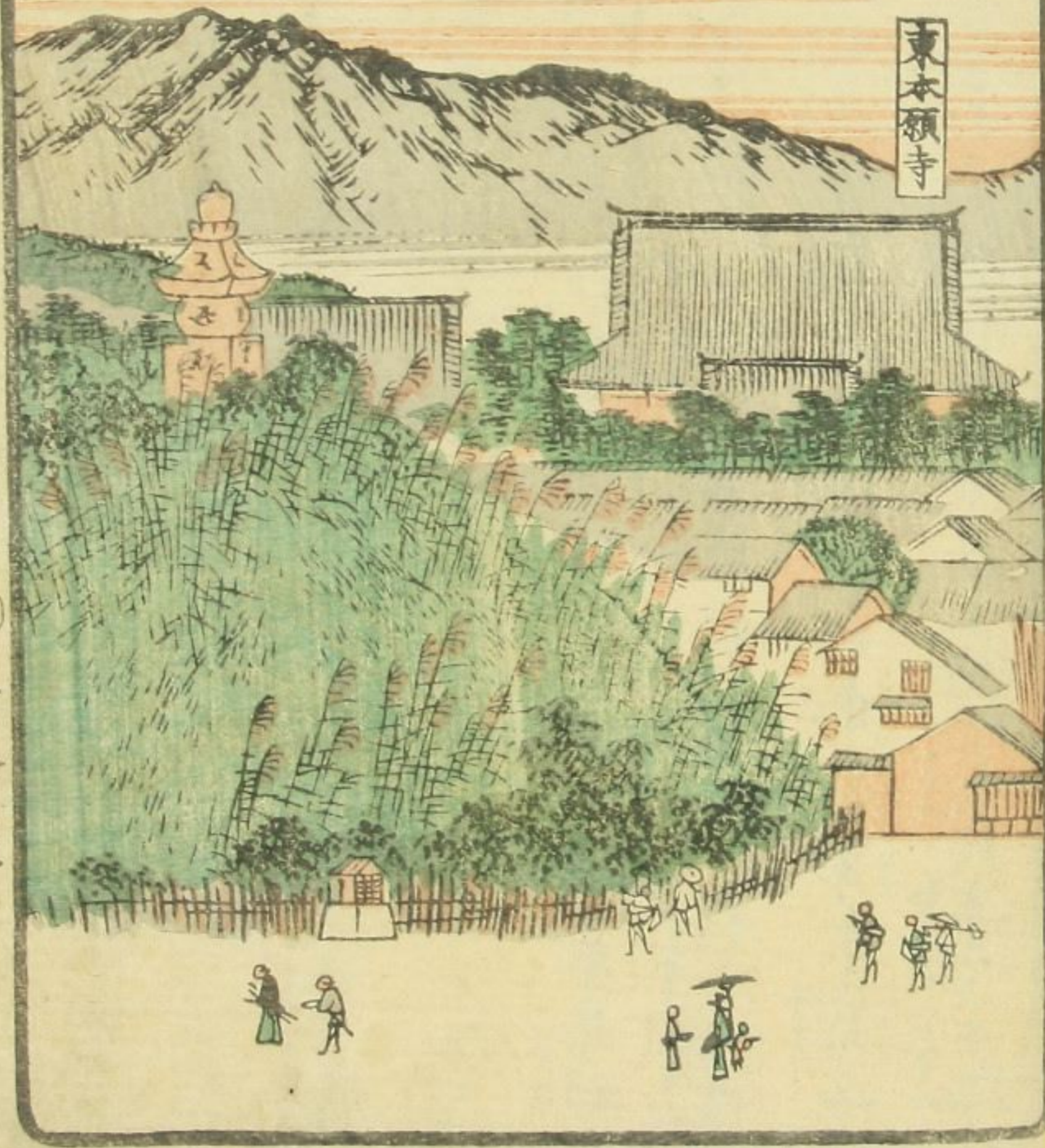
瓦士

耳塚

まわく声

つれ郭公

柳亭



大像より出火して佛殿より回祿以同十五年秀頼公より再営  
りる寛文二年本尊銅像と改めり木像より北山浄住より  
彫刻は太閤秀吉公の石塔婆の佛殿の南より豊國社荒廢の後  
是と營しより塔前の石燈燼より慶長十年九月より

蓮華王院三三間堂 大佛殿の南より 人皇七十五代崇徳院御宇天治元年鳥羽  
上皇の本願よりて建立あり千手観音千体と安坐し得長壽院

と号は其後又後白河院長寛二年御願よりて建立あり新ふ  
千手千体と安坐し此時改めり蓮華王院と号は本尊千手

観音の座像より長八尺康慶の作り二十八部衆あり檀上よ安  
置は千手千體の堂内の左右に座は運慶康慶のあり堂を

東向 南北六平間二尺四寸六分東西八間三尺七寸 棟高六間尺六寸 近世諸士此堂に於て  
二間と隔て柱と立てば三三三間堂といふ 耳塚 正面三門の  
前より 文禄元年朝鮮征伐の時小西行长加藤清正と大将より

数々の敵兵と討取首と日本へ渡さん事益々れば斬断して送り  
しと此所を埋り耳塚といふ

名物大佛餅屋 耳塚の西より 大佛殿建立の時より此餅とあり賣弘むり  
唐破風作の額標版に正水の筆より代りて其名高し

大佛北門前馬町とある趣き大津に至る御所なり是と瀧谷城と  
号す 山科郷御所村より日高より来る路に入り出立これより向ふ  
朱雀四のふちと経く過台より一基の御所なり

經信忠信石塔

馬町の小御民家のうちあり石の大塔二基あり落ニ云  
永仁三年二月二十日施主法西云又一基の後

一説より此辺に等光寺あり寺あり其寺の寄附塔ありんと云  
山城志ニ云元在六条坊門松屋町大安寺ニ寺廢後石塔于此た  
佐藤兄弟の事其證あり

三嶋神社

右のありある谷の道より下これ同一  
右月所より大岩の社あり例來九月十六日安産と守りあり

祭神三座

衆人群衆の當所の生土神あり産子に代襲と禁じ喰ふこと  
大山祇神 木花開耶姫  
岩長姫ホのニ神あり

燈籠堂古蹟

正林寺の西の方人家の北に谷あり是と小松谷といふ此所小松内大臣  
重盛公の山莊として則燈籠堂の跡あり

源平盛衰記云大臣常居あり四方に四十八間と點一一方に  
十二光佛と一体づ立てまつり其前毎に常燈と燃せられれば  
四十八の燈籠ありぬ此大臣と異名に燈籠の大臣とぞ申さる云

斯つら此小松谷より山莊に於ての事あり

正林寺

馬町の東より小松谷より浄土宗開基ハ  
惠空上人あり

本堂

殿舎づつりて南向あり此地の月滿禪定兼實公の旧跡  
由法より九條殿より御所附あり本堂あり檀上の

中央に圓光大師の像とあり此余阿弥陀堂岡山山堂鐘樓經藏方丈庫裏  
鎮守樓門ホ巍々あり兼實公の御所なり時小松殿と号せし  
法然上人此殿の御堂ありしなり  
黒谷傳記に見へり

千とせらゆ小松のものと成恒家にて無量寺の蓮とぞま 漁空上人

玉章地藏堂

小松谷の東にあり樹々の左傍あり木下地藏菩薩座像長七尺余

傳云此尊像ハ小野小町の作なりと此人彩色するびるると以て深野

おとと悩乳とてと數にて親疎と分るべ艶書と稱するも降雨の

如しく老後愛執の罪と悲んぐ滅罪のとも自ら此像と作る

其艶書と集めて腹内に藏ひ是故に玉章の地蔵と号するなり

昔不道者つづく腹内に艶書ありと傳へ聞くとこれと採んとめ

此像の後と破るるとその後豊太閤の北政所の右筆小野通女との

尊像と信じて破損と補ひ手自張る彩色とも加へると我腹

内より長三尺許の石の五輪あり銘と慈眼大姊とあり年月は詳らるべ

又一説より深草少將玉章と此地藏尊に奉納して小野小町と相違

の縁と祈るといふ何れも是より哉とるべ

清閑寺

玉章地藏の東藩谷街尾のやあり延暦二十一年詔繼閑基とあり

本尊千手觀世音 立像長三尺余 要石 客殿の庭中ニあり一説より六条院

高倉院御陵

右本堂の北半町許あり山の内より二間半四方石階と積上り

るは霧の立ち入山の紅葉とみまらるるゆと夫とてなり 御製

小督局墓

同陵の左の方より此局の高倉帝の御寵愛他と異なり一と云  
横町中納言の女より委く源平盛衰記に見へり

高倉帝の愛せしや給ひし余風として今も尚此地に丹楓多しなり

暮秋の頃ハ錦繡と晒びが如く眺望せしめ美観なり

潘谷

小松谷の東三町間の通称なり其の地谷ありて古く此所に寺院ありてや  
後土御門院皇子増仁僧都と潘谷宮と号し

元慶寺

北花山潘谷街道の北の辺よりなりて天台宗近世禪宗と改む  
花山法皇御剃髮の旧趾なり

本尊薬師佛

座像七寸僧正 脇士 毘沙門天 運慶の作

僧正遍照像

自作坐像入り玉守 花山僧正より俗姓ハ良峯宗貞  
仁明帝の近臣より剃髮して當寺に住し終に僧正となる

花山法皇像

座像七寸僧正 脇士 毘沙門天 運慶の作  
應永十一年に  
佛檀に安置

伽藍と草創し紀元と配して元慶寺とす

遍照墳

元慶寺の南二町斗民家の西田間にあり  
塚のありて柿樹数株あり

東山寺

元慶寺の奥より禪宗本寺なり釈迦佛座像二尺五寸阿基ハ大円宝鑑  
国師拾芥抄云東山寺花山と号し

阿弥陀堂

元慶寺の西より本寺阿弥陀佛座像四尺許阿弥陀峯阿弥陀堂  
のなかより一説に重盛公燈籠堂のなかよりなり

梅本寺

元慶寺の南より禪宗曹洞派中興ハ加列金沢大乗寺四十一世祖  
傳和尚なり

本尊十一面觀世音

長二尺脇士ハ愛深明王不動の両尊とあり此寺と  
及指の釈言と号し花山法皇西国三十三所の冥福

と巡行し人時即自取發佛と負せし玉轉つれ給り人々其寺の始祖  
佛眼上人及指の師衣に釈言と再し即育うけさせれ巡りし其及指の釈言  
と接し其寺のなかよりなり  
及指の釈言と号しけり



奴茶屋

栗田口日岡より来る大津街乃瀋谷越と此とららるる合ふ是より  
向大津街乃一條より各所此方彼方行まて都とりの報

以上大佛馬町より此所まで瀋谷越の左右あり

○大佛前伏見街道と直上上り五條橋建仁寺町四條通繩手

大和橋三條通一至此南北の街乃と大和大路と下る俗

伏見街乃乃三條通より北へ道より東へ白川橋より栗田口

蹴上日岡と歴々追分へ出大津札辻一至于街道之西洛中

の繁花して街巷の結構往來の賑ひの言も尽しがく且洛中

洛外の名所回跡ハ勝計るべし都名所畫會と圖して知べし

花おそく

女馬車

宗永

戸

塵外樓

大馬車

柴の舟

火の利心の

舟

舟

淀川兩岸一覽登船下之卷終



編著 浪荅 曉晴翁

畫圖 公案 川羊山

備書 帝都 鎌田醉翁

曉晴翁著

宇治川兩岸一覽 中本全貳冊

松川羊山画

追刻

文久元年酉年季春發行

出陣

江戸日本橋通式丁目

山崎屋左衛門

系部表屋町小路

表屋清右衛門

大坂心齋橋通小橋町

河内屋左衛門

早稲田大学図書館

011688994839